行田の古代11

酒巻十四号墳（酒巻）

第11話

ツーピースを着こんで

酒巻十四号墳からこの埴輪と同じ服装をした男性像が二体出土しています。彼らの服装は、これまで出土した埴輪が着ている古墳時代の男性の一般的な服装とはいくつかの点で異なる特色をもっており、まさに当時のニューファッションであったようです。

まず髪形は「みずら」と呼ばれる頭の両側で束ねる髪形をしていません。上着には帯を巻かず、手先も表現されていないことを見ると、手も出ないほどの長い袖を持った上着であったと思われます。

ズボンも一般的であった裾広がりでなく、膝下に脚結（あゆい）という紐も結んでいません。

この袖の長い上下のツーピースタイプの服装は、現在日本では、千葉県市原市にある山倉一号墳出土の人物埴輪が同じ服装をしているだけで、日本全体でまだ三例しか類例がありません。

そこで、この服装と同じものを朝鮮半島に探していくと、やはり高句麗（コグリョ）の舞踏塚（ムヨンチョン）や長川一号墳（チャンチュワン）の壁画の中に全く同じ服装をした人々が描かれています。

行田の古代12

酒巻十四号墳（酒巻）

第12話

フンドシ姿もりりしく

この埴輪の最大の特色は、フンドシを締めているところにあります。

「フンドシかつぎ」という言葉があるように、フンドシといえば、「まわし」を意味し、力士がすぐ連想されます。

この埴輪も実は力士を表現したもので、両手が欠けているものの、右手を上げ左手を腰にあててシコを踏むときの姿を表現しています。

力士を表現した埴輪や土器の飾りに表現された力士などは五世紀後半頃から出土してきますから、この頃相撲が大陸から日本に伝わってきたと考えられています。

相撲のルーツは中央アジアやその周辺の遊牧民たちの格闘技で、朝鮮半島を通り日本には裸にフンドシを締めて格闘する、相撲という形で入ってきたようです。

日本の神話に天照大神（あまてらすおおみかみ）が立てこもる天の岩屋戸（あまのいわやど）をこじあけた力持ちの話がありますが、これと同様に埴輪群が表現している儀式を守る役割が、力持ちの力士の埴輪には与えられているようです。

行田の古代13

酒巻十四号墳（酒巻）

第13話

おめかしをして

耳にイヤリング、首には大きな玉の首飾りをつけ、服は二カ所を紐で結んだワンピースタイプの女性像です。

髪は、欠けている所がありますが、分銅形の粘土板を後頭部に張り付けた形で表現しています。この髪形が現代のどの髪形に似ているのかははっきりしませんが、長い髪を後頭部で前後に折り返して、中央部を紐で結んだ形になるかと思われます。

おめかしをした女性像ですが、男性の埴輪と比べると実は大きな違いがあります。それは足が表現されていないことです。

足まで表現されているものを全身像といいますが、埴輪の全身像といえばだいたい盛装した男性の場合で、女性の場合は巫女を表現したものに少し見られるくらいです。

つまり、足まで表現されるのは、この古墳に葬られた人物や後を継いだ人物、大切な儀式を司る巫女など、当時身分的に高いとされる限られた人々だけでした。

千四百年前、彼女はその瞳で何を見たのでしょうか。

行田の古代14

墓前祭祀（酒巻八号墳）

第14話

郷土博物館内に復元された墓前祭祀

祈りをこめて

今回は、石室に埋葬された死者にささげられる祈りと祭のあとを紹介します。

酒巻八号墳は十四号墳の南東に位置し、全長約二十七メートルほどの前方後円墳で、石室は河原石を積み上げた横穴式石室です。この石室の南側にむかう位置に写真のような須恵器大甕（すえきおおがめ）を中心とした祭りのあとが見つかっています。この須恵器に何が入っていたかはっきりしませんが、おそらく現代のお葬式でも墓に供物の膳をあげるのと同じように、食べ物や酒などが入っていたと思われます。

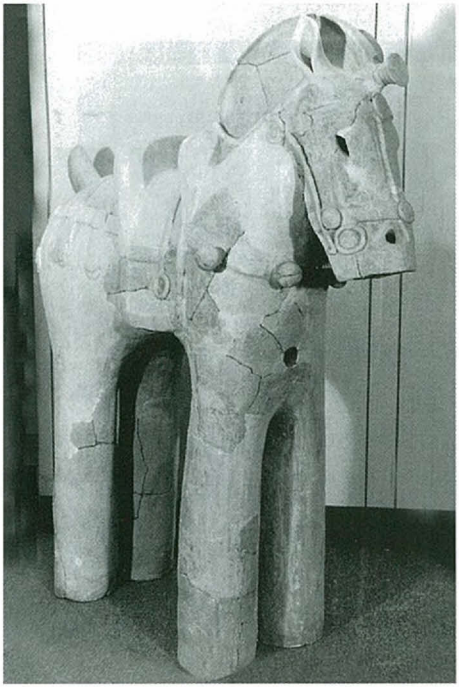
さらにこの須恵器の前に五頭の馬が配置されており、その馬に囲まれた空間で死者に対してお祭りが行われ、深い祈りがささげられたと思われます。

こうした大型の須恵器を使ったお祭りは、近くでは酒巻二十号墳やさきたま古墳群の中にある中の山古墳などでも確認されており、六世紀の終わり頃盛んに行われていたようです。

行田の古代15

馬形埴輪（酒巻一号墳）

第15話



この埴輪は現在、さきたま資料館に展示中

馬を愛した人々

酒巻古墳群の特色を、馬形埴輪を通し、考えてみます。

この埴輪は、高さ百二十六センチメートルほどの大きさで、埴輪としては大きいものです。

酒巻古墳群では、十四号墳で四体、八号墳で五体の馬の埴輪が出土しています。また、小さな古墳でも馬の埴輪は必ずあり、しかも大きくて丁寧に作られているのが特色です。

こうした点からも古代の酒巻に住んだ人々は、馬に対して特別な愛着を持っていたことが伺えます。

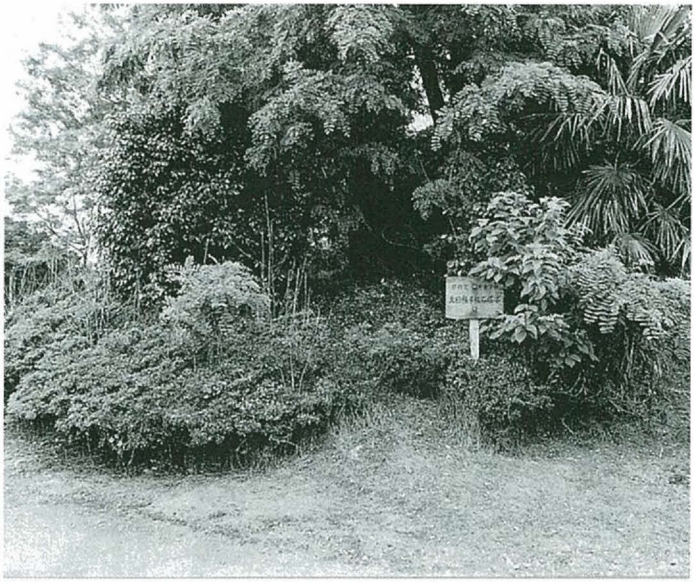
馬は本来日本にはいなかった動物であり、五世紀初め頃近畿地方に朝鮮半島から移されて飼育されるようになり、それから全国に広まったと考えられています。

酒巻の場合、サカマキのマキは牧場の牧が語源で、馬を飼育していた牧場があった。あるいは高句麗の騎馬軍団の装備を模した旗を立てた馬の埴輪があるように、騎馬兵の戦闘集団であったなど、地名の由来や古代の酒巻に住む人々と馬の関わりについていろいろ想像することができます。

行田の古代16

大日塚古墳（佐間）

第16話



一つのお墓に

佐間地区にも埼玉古墳群とは別の古墳群がありました。

その一つ大日塚古墳は、市立史料館の入り口にあり、削られていますが約二十二メートルほどの円墳と考えられています。

昭和五二年に行われた発掘調査から六世紀の初め頃に作られた古墳であることがわかりました。古墳を上から掘っていくと、木の棺を粘土でくるんだ粘土槨が二つ並んで発見されました。次に、粘土槨のすぐ下から長瀞の緑泥片岩を使って組み合わせた石棺が出てきました。石棺の中身については、古墳をそのまま保存するため全部解体して調べませんでしたが、この中に埋葬されていたとしたら、一つの古墳に三人が埋葬されていたことになります。

一つの古墳に数多く埋葬されることは、稲荷山古墳に礫槨と粘土槨があるように、この時期には珍しいことではありません。現代でも一つの墓に骨つぼをいくつも一緒に埋葬できる方法がとられていますが、よく似ているといえます。

行田の古代17

稲荷山古墳（埼玉）

第17話

さきたまの謎1

今回から、さきたま古墳群の謎について考えていきます。

まずは稲荷山。この古墳の最大の謎は、五世紀末から六世紀初頭ころに、なぜ突然この地域に巨大古墳として出現したのかにあります。

古墳は一般的には三世紀半ばころから造られ始め、六四六年の大化の薄葬令以降は急速に減少します。埼玉県内では、四世紀から造り始められ、八世紀初頭まで造られます。

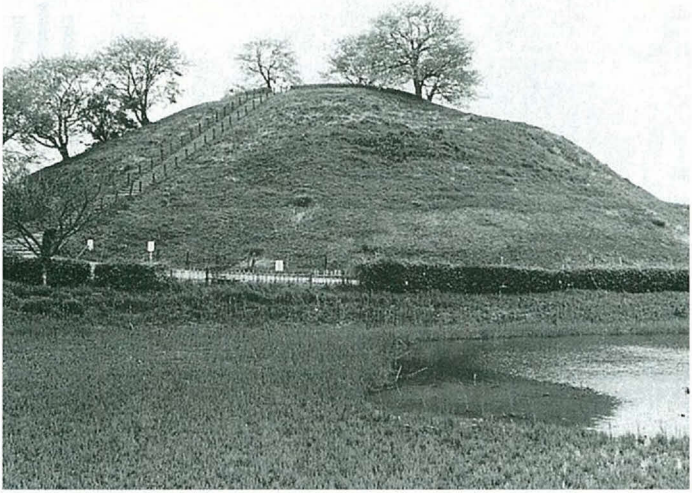
ところが行田周辺では稲荷山古墳より前に造られた古墳がまだ未発見です。その理由として当時まだこの地域には支配力の強い豪族がおらず、いわば広い未統一の地域であったことが想像されます。

この地域に稲荷山を造り、県下最大の前方後円墳である二子山古墳をはじめ大型の前方後円墳を集中して造った一族が出現したのです。この一族はもともとこの地域にいた豪族で急速に勢力を強めた一族なのか。古くから古墳を造っている比企地方をはじめ別な場所から進出してきた一族なのか。まだ議論の分れるところで未解決の謎です。

行田の古代18

丸墓山古墳（埼玉）

第18話



さきたまの謎2

この古墳については、第三話で聖徳太子伝説に関わる古墳の一つとして紹介しました。今回はまた違った目でこの古墳を見ていきます。

この古墳は直径約百五メートルの円墳（えんふん）で、高さも十八・九メートルと大きさも高さも飛び抜けて大きなものです。百五メートルという大きさは円墳では全国でも最大規模ですし、高さでは埼玉古墳群内では最も高い古墳です。

この古墳が造られた時期は、六世紀初め頃で、稲荷山古墳よりは新しく、二子山古墳よりは古い時期と考えられています。つまり埼玉古墳群内では、稲荷山古墳につづいて造られた古墳ということになります。

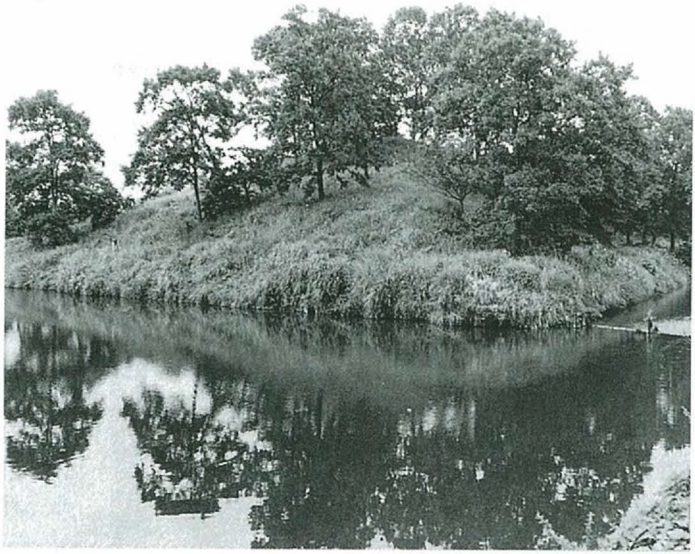
この古墳の最大の謎は、円形をしていることにあります。

稲荷山古墳、二子山古墳、鉄砲山古墳、将軍山古墳など百メートルを超す大型古墳。瓦塚古墳、中の山古墳など七十メートル級の中型古墳。五十メートル級の小さな愛宕山古墳でさえ円形に台形をつけたような前方後円（ぜんぽうこうえん）形をしているのに、ただ一つ丸墓山古墳だけが円形をしているのです。なぜこの古墳だけが巨大な円形に造られたのか、いまだに大きな謎になっています。

行田の古代19

二子山古墳（埼玉）

第19話



さきたまの謎3

二子山古墳は、名前のとおり二つの山が連なったような均整の取れた美しい古墳です。全長一三五メートルの前方後円墳で、さきたま古墳群のみならず、埼玉県で最大規模の古墳です。現在は内堀だけ復元されて水が満々とたたえられていますが。本来は二重の堀を持つ大きな古墳で、花菖蒲のある部分が外堀になります。

この古墳の最大の謎は、この古墳に葬られた人物がどのような活躍をしたかにあります。

つまり、この人物は五世紀の末ころから六世紀の前半にかけて活躍したはずで、その時期は四七九年に全国を統一したという雄略天皇が亡くなり、中央ではそれ以後大連（おおむらじ）の大伴氏、物部氏などの豪族が中心になり大王権を巡る勢力争いが活発化した時期になります。それはまた中央の争いだけでなく、地方の豪族をも巻き込んだ争いでした。その争いにさきたまの豪族も無縁でなかったはずで、どちら側につくかで、その後の運命を決める程のものであったはずです。

激しい勢力争いの中で、二子山古墳に葬られた人物は埼玉県で最大の古墳に葬られるようになったのですから、生前にどのような活躍をし、どのような決断をしたのでしょうか。

行田の古代20

小円墳群（埼玉）

第20話

さきたまの謎4

稲荷山古墳南側の広場に、植木で表現されている小さな円墳が七基あります。

古墳は直径三〇メートル前後の円墳で、航空写真などから、周辺にかつては三六基あまりあったことが分かっています。

植木で復元された七基の古墳には、埼玉県指定文化財である水鳥の埴輪が出土した古墳。梅塚（うめづか）と呼ばれ人物埴輪や土師器（はじき）、須恵器（すえき）を出土した古墳などがあります。

出土品からこれらの古墳は、稲荷山古墳とほぼ同時期の六世紀初頭に作られていることが分かります。

問題は、この小円墳群に葬られた人々はどんな活躍をした人たちだったのかです。

百メートルを超す大型古墳と直径三〇メートルくらいの小円墳。その差は歴然としています。

古墳の規模の違いは、そこに葬られた人の力の差として認識されています。稲荷山古墳に葬られた人物が、この地方に勢力を伸ばしたとき、手足となり活躍した人々が埋葬されていると考えるのが自然ですが、実際はどうだったのでしょうか。